王妃の資格

行見　八雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王妃の資格

【Ｎコード】
Ｎ７１１７Ｔ

【作者名】
行見　八雲

【あらすじ】
ある日突然異世界へやって来た女性が、たまたま王様に拾われ、お城で働きながら生活することになった。
そんなある日、いきなり王様から王妃になってほしいと言われ、考え直すよう言いに行くお話です。

（前書き）

異世界トリップもののお話が、大好きです。

勢いで書きました。似たようなお話があったらすみません。

これは地球とは異なる世界のお話。

蒼天の空に可愛らしい小鳥が羽ばたく、ある日のこと。

ここ、世界で一番大きな大陸のほとんどを占める大国、アセスフィアの王城の王の執務室では、長い黒髪を後頭部で纏め、シンプルなドレスに身を包んだ女性が、群青色の髪の美丈夫に詰め寄っていた。

「ちょっと、陛下！　私を王妃にするって、本気ですか！！？」

今にも美丈夫――――この大国の現王である――――の胸ぐらを掴みそうな勢いで、女性は眉を吊り上げて声を張り上げた。

「ああ、本気だ」

そんな女性の勢いを気にもせず、王は手に持っていた書類を執務机に置いて、女性へと向き直った。

その相手の余裕に満ちた態度と、見上げるほどの長身に女性はむっと眉間に皺を寄せる。

「無理無理無理無理無理！！　私なんか王妃にしたら大変なことになりますって！」

両の拳を握りしめて、全身で否定する女性に、王は苦笑いを浮かべて。

「前にも言っただろう。俺が惚れているのはお前だけだ。お前以外、王妃にするつもりはない」

「いやいや！　それだって、陛下に対して初めて会った時から気安かったとか、言動が突飛で見ていて飽きないとか、そんな理由ですよね！？

でもそれって、私が異世界人だからですって！　異世界、特に私のいた国には、王様なんていなかったから、対応の仕方が分からなかったからですし！

突拍子の無い行動だって、この国との価値観の違いからですよ！

この国での普通が普通じゃないからですよ！

それを新鮮に感じただけです！　どうせそのうち目も覚めますから、もっと落ち着いて考えて下さい！！」

勢いのまま、女性はそう言い切った。

そう、この女性、水瀬咲良（みなせさくら）は、ある日突然異世界からこの世界にやってきて、たまたまこの国の王に拾われ、王城で仕事をしながら生活することになったのだ。

そんな彼女がこの世界にやってきて、かれこれ一年は経とうとしていた。

だいぶこの世界に慣れたかな～と、思っていた矢先の王の告白に、咲良は心臓が飛び出るほど驚いた。しばらく心臓が拍動のしすぎで

痛かった。

そして、先ほど城の者にお祝いの言葉を言われ、王の言っていたことが本気だったと知り、しかも国中にすでに話が広がっていることも知り、慌ててこの執務室に駆け込んできたのだ。

（みんなに冷やかされて、顔から火が出るかと思ったわよっ！！）

「第一、私はまだこの世界のことを良く知らないんですよ！？　そんな女を王妃にしたら、常識が無いだとか、マナーがなってないとかで、国の品位が疑われることにもなりかねません！　だいたい――――」

咲良が言葉を続けようとしたとき、コンコンコンと勢いよくノックの音が聞こえ、執務室の扉が開かれた。

「失礼致します。咲良様、例の上下水道整備の報告書が届いております」

そう言って、文官服の男が咲良に、手に持っていた書類の束を渡す。

それを受け取った咲良は、ぱらぱらとページを捲り、ざっと目を通していく。

「いや、その様付止めて。――――うん、工事は順調のようね」

そう頷いていた咲良だったが、あるところでぴたりと目線が止まる。

「ん？　この金額おかしいわね。これにはこんなに費用がかかるはずがないのに……。担当は、あの欲深貴族のおっさんか。
費用の着服の可能性があるわ。以前調べさせた時も、疑わしい事例が大量に出てきてたし。
私の権限の使用を許可するから、あのおっさんの屋敷、隅々まで家宅捜索してきてちょうだい」

「はっ！」

咲良がそう言って、書類を文官の男に返すと、男は頷き礼をして早足に執務室を出て行った。

文官の男が出て行った後、咲良は再び王へと向き直り、

「えと、それで、何でしたっけ？
あ、そうそう、大体、私のような身分の無い、どこの馬の骨とも分からない女を王妃にするなんて、他の貴族達の反対に――――」

「この間、ベルグラード公爵家の養女になっただろう」

「……そうでしたね……」

二月ほど前、何となく公爵家一家に気に入られた咲良は、あれよあれよという間に、養女にされていたのだった。

王の切り返しに、咲良はぐっと言葉に詰まった。

「あ、でもでも、私は王妃の教育も受けてませんし、国内の情勢の

ことだって――――」

コンコンコン！

再び軽快なノックの音が聞こえ、先ほどとは違う文官服の男が「失礼します」と声をかけ、扉を開けて入ってきた。

「咲良様、こちらは、先だって考案されました調味料の、市場での評価や流通状況の報告書です」

そう言って、手に持っていた書類の束を咲良へ差し出す。

「だから、その様付止めてって。

うん、市場への広がりはまずまずね。今度は、あれを使った料理を考えて、国内に広げてみよう。

あれが世界中で取引されるようになれば、国にとって良い収入源になるし、この国ならではの料理が流行れば、国外からの観光客もお金を落としてくれるしね。ふふふ、金の余ってる珍しいもの好きの貴族達が、好みそうな料理を考えないと。

そう言えば、国の南東部のシュクト地方を、遺跡や温泉を売りにした保養地にするのもいいわね。ああ、ちゃんと自然破壊はしないから安心してね。

うん、近々視察に行くわよ。人選は任せるわ。調整をお願い」

咲良が文官の男を見ながらそう言えば、男も表情を引き締めて頷いた。

「はい！　お任せください！」

そのまま礼をして退出する男を見送って、咲良はまた王の方へ体を向け。

「え～～～っと、だから、私には王妃に相応しいような気品も、カリスマ性も、威厳もな――――」

コンコンコン！！

焦ったようなノックの音が響き、執務室の扉が開かれた。

「失礼します！　咲良様！」

またしても、先の2人とは違う文官服の男が、早足で咲良へと近づき、急ぎの用らしく何事かを耳打ちする。

「だ～か～ら～、その様付止めてって……」

男の報告を聞いていた咲良の眉間に、ぐっと皺が寄った。

「あのハゲ子爵が！　議会で決まった法律に従わないばかりか、そんなことまで！」

忌々しそうに呟いた咲良は、王に退出の挨拶をしてから、早足で扉へと向かっていく。

「私が制圧に向かうわ！　クァルテ達を呼んでちょうだい！」

「はっ！　直ちに！」

文官を付き従えていくその凛とした背中が、扉の向こうへ消えて

いくのを見ながら、王は愛おしそうに目を細めて微笑んだ。

「お前以外に、誰が王妃に相応しいというのだ」

（後書き）

このお話は、主人公最強ではありません。主人公は、普通の（？）一般人です。

主人公の周囲が最強ぞろいです（クァルテ達もその中の1人）。

※少し行間を変えました。読みにくい等ご意見がございましたら、お寄せ頂けると助かります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7117t/

王妃の資格

2011年6月1日20時03分発行